

里地通信 12月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

連載：幹事紹介 原風景をめざしていこう

竹田純一（たけだ じゅんいち）
里地ネットワーク事務局長

小学校当時、祖母や父とともに里山をかけまわった。クワガタ、カブトムシ、タマムシ。耕運機とリヤカー、いちごや里芋、おばあちゃんの手と野良着、そして、薪のお風呂。脳裏に焼きついた東京町田の原風景。毎週のように日の出とともに、近郊の小川や河川に出かけ日が暮れるまで遊びまわっていた日々。真冬の小さな水路で木箱にいっぱい釣ったタナゴや小ブナ。真夏の陽ざしを浴びて泳いだ清流の水しぶき。体にしみ込んだ川やサカナたちの手ごたえ。

昭和40年代、日本の里地、河川は、急激なコンクリート工事にさらされる。みるみるうちに変わり行く目の前の原風景。里山文化とそこで暮す人々の生活、人と人、人と自然の関係が、奥山、里山、水系を壊すことで知らず知らずのうちに崩壊していく。自然のありようと人のありよう。農的な生産をともなう多様な暮らしぶりから、都市型の浪費型生活へと都市も里地も変遷していった。このまま、時を刻むとどうなるのか。縄文、江戸そして戦前までに伝承されてきた里山文化、生活文化、かろうじて、昭和30年代くらいまで日本の各地に残っていた里山での暮らし。自然と共生した生活技術。これらを体に刻んでいる日本人は、もはや、

70才を超えた匠たちにしか残されていないのかもしれない。しかし、全国各地で、伝承技術をもつ匠たちは、まだ健在だ。はやく、急いで、我々は、知恵と技術の伝承を受けなければ、それぞれの地域固有の風土と共生の思想と文化を失うことになる。

10年前、子育てが本格化した我家は、生活の全てにおける見直しを行った。浪費型の生活から生産型の生活へ、金融という職業から調査開発モノ作りに関わる職業へ、化学物質を含む食料から安心できる食べものへ、高気密住宅から古い木造住宅へ。そして、競争から共創へ、教育から共育へ、さまざまな主体が共生できる暮らしを求めて、さまよい始めた。

地域固有の文化とは何か、生活文化とは、先人の知恵とは、文化の伝承とは、日本とは、モンスーンアジアとは、人とは、自然とは、そして、共生とは。

数世紀、数十世紀続いてきた里山文化の中から、私は、その仕組みや文化を学び、持続型循環型地域社会の存続の仕組みやシナリオを描きたい。そして、自ら新しい時代の循環のしくみの中で生活そのものを楽しみたい。里地ネットワークは、自分自身に活力を与えてくれる。共に行動し共に共創する仲間の輪が、もっと大きく広がり、我が子、そして孫に自信をもって引き継げる社会を共に残したい。共に頑張りましょう。

経歴：昭和35年東京都目黒区生まれ。昭和52年世田谷工業高校機械科、昭和57年中央大学法学部卒業。三菱系リース会社（総務部）、英国シンクタンクにてジャパンマーケティング、日本リサイクル運動市民の会にて長野県四賀村「坊主山クラインガルテン構想」、静岡県函南町「酪農王国構想」、秋田県二ツ井町「森で遊び林業を考える学校」。各地へのエコツアーの企画実施、有機農業運動の全国組織DEMANDA事務局、20都道府県での「生命のまつり」の開催、農水省「有機農産物等の栽培基準委員」、環境庁「環境パートナーシップ協議会委員」、重油回収「救え日本海ボランティアネット」企画運営。等を経て現職。（竹田の写真は10ページ）

里地セミナー報告

環境土木技術について

講師：福留脩文

西日本科学研究所代表取締役

開催日：平成10年11月27日（金）

場所：リクルート銀座8ビル 大会議室



スライドを中心に全国各地で福留先生が実践している近自然工法について説明していただきました。「形を崩す」こと、「地形に沿った」「自然の材料の特性を生かした」数百年通じる土木技術、世代を越えて数百年を耐えてきた石積技術。福留先生の近自然工法は、城壁

などの石積から学んだ伝承技術、コンクリートに依存した近代の技術と比較すると創造を絶する耐久性と過去の英知がそそぎ込まれた想像を絶するものでした。

「近自然工法は、思想と技術である。思想抜きの技術は怖い」と、かつて近代的な土木工事を行っていた現場から180度の方向転換を図り、福留流の近自然工法を実践する現場技術者の言葉には本物だけから伝わる説得力を感じました。

スライドを見なければ伝わらないであろうなとも思いますがとりあえずご報告いたします。（竹田）

下北半島の大畑町の河川改修事例

町の人たちが、自分たちの川を何とかしたいと運動をおこしたのが始まり。建設事務局にお願いして、近自然工法を使った河川改修の試験施工を行なった。これによりアユが川に戻ってきた。

この時、新聞の取材で「3週間で川にアユが戻ってくる」という発言をしたところ、3週間後、その検証をする取材が現地で行なわれた。

3週間というのはアユの餌になるケイソウが成長で

きる期間。その期間を推測し発言したが、確信はなかった。結果は、本当に戻ってきたのでよかった。

近自然工法とは、ある特定の生物を増やす訳ではない。自然を丸ごとを復活させることに目的をおいている。現代は、自然の復元力を無視して、単一の生物を増やすことにしか注目しておらず、例えばその生物を放流することによって復元したと考えているところがある。

生態系において、生き物に必要な底辺は、「日光」「炭酸ガス」「水」。これがあることにより、水中ではケイソウが発達し、それを食べるアユが戻ってくるという訳。このことがわからないと、自然は復元できない。ところで、最近のアユは体が小さい。これは、餌が少なくなっているからではないだろうか、と思う。

完成された石積み技術

日本独特の石積み技術は、鉄砲伝来（1543年）後の安土桃山時代から江戸時代の寛永年間にかけて完成されていた。これは、秀吉の時代に肥前名護屋城が築かれたもので、ここでは丸割石が使われている。これが私の技術の基本となっている。棚田の石垣などにも使われている。しかし、この技術は、明治時代に石が規格化されたことによって、消えていった。

近自然工法はかつての伝統工法をも現代にアレンジして使っていく新しい考え方。近代の土木の世界では理解しにくい。今はとにかく理解をしてもらうこと。そのためには、それをどう説明するかを考えなければならない。

スイス・シールの森

ここは生態学的に考えて人工林を天然林に変えていくようにしている。

例) 金属を使わない...ベンチ、柵等に間伐材を使用する。ただし、間伐材は、耐久性に欠ける。しかし、

逆手に取ると林業の活性化につながるし、材は自然に還る。これは持続発展可能と言える。また環境教育の場としても使っている。ここでの環境教育は「人工物を持ち込まない」「説明をしない」「強制しない」を理念としている。

四万十川源流

5年間、四万十川源流の自治体とスイスに勉強に行った。四万十川の源流といってもそこは人工林である。村の人たちはスイスを見て、人工林を自然林に戻したいという想いになり、持ち主である営林局に相談した。そして、水源涵養林に指定されているその人工林の制約をいろいろクリアして人工林を伐採し、いろんな樹種を植えた。

木の土留め（スイスでの事例）

これは腐ることによって物質が安定し、やがて自然に還るような仕組みになっている。だから生態系にとって多様な環境を提供できる。また、農閑期に作業を行なえるし、毎年少しずつ保全していくこともできる。こういうのが持続型の環境土木そのものではないか。

鹿児島県屋久島

上屋久町長に、登山者ができるだけ地面を踏まないように、山道を近自然工法でやってほしいといわれた。当時、河川はやったことがあったが山道はなかったので、「考えさせてくれ」と言って、寝ても覚めても考えていた。何回か現地も見た。その時、屋久島にある古い石の道の跡を見た。秀吉の時代、屋久島は「木を伐るのは男の仕事、木を運ぶのは女の仕事」という役割分担があり、女の人が運びやすいように石の道をつくった。これがまだ残っていた。これは、「そこにある石をあるがままに使う」方法で、しかも歩いても疲れなように積み上げている。これを参考に勉強して、道の周囲15m以内の石を使って、近自然工法の山道を造った。

高知県鏡川支流芳原川

この親水公園は石をくさびのようにして積んだ堰堤を順々につけることによって川の流れを作り、公園を作った。これは魚にも適している。

愛知県豊田市

日本初の河川の近自然工法を10年前に800m行なった。工事が始まると、その地域のお年寄りたちは、「昔の景色が戻ってきた」と喜んだ。工事が完成すると、地元の人が祝賀会を開き、県の担当者に感謝状を贈ったほどである。このように生態系が回復したことにより、人の心も回復し、地域のお年寄りたちの変化には驚かされた。

そうして、その河川敷には多くの人を訪れた。しかし、訪れる人によってゴミが多く捨てられるようになった。そこで地元の老人会が、自主的にゴミ清掃を始めた。何回もそこを訪れている人は、だんだんその老人会と顔見知りとなり、ゴミを捨てなくなった。

これを見た対岸の人も「自分たちの河川敷もやってくれ」ということで、同じ800m近自然工法による河川改修を行った。

そのように川が変わってくると、周辺もそれに併せて変わってきた。地元の人たちは、自分たちで工夫してその環境整備に参加した。例えば小さな橋は木と竹で造った。「壊れたら自分たちが直すから」といって。年寄りはいくらも直すような知恵を持っている。老後やることなく、知恵も体ももてあましたいた。だから、これらによってやりがいを見つけて生き生きとしてきた。

市内に2 haの都市公園があった。それを自然の森に戻していくプロジェクト。トイレの周り以外はすべて草地。直線の道もなく、舗装もされていない。すべて、砂利、木にチップである。フェンスも皮付きの木を使っている。草地であると蚊が増える、というがそんなことはない。周囲の環境が整っていれば、蚊はその環境の中で暮らしている。

ここは、地域のお年寄りが管理している。管理事務所が必要ではないか？と市が聞いたところ、「縁側付きの平屋がほしい」。それが実現。これも年寄りに管理を任せているということ。

公園の敷地内にあったプールも取り壊した。当初は、子どもたちの遊び場でもあるプールをなくすことは地元の皆は大反対。しかし、地元の人たちの話し合いでこれが実行され、地下に埋設されたかつての小川が完全によみがえった。

都市部の近自然工法

私は何も三面張りをすべて否定している訳ではな

い。生態系を大事にすることが近自然工法である。水と川底や川岸の砂利と泥の関係が大切。三面張りでもその環境にあった生態系をつくるのが大事。川は、水が土砂と一緒に流れ、土砂が水の流れをつくる。都市において三面張りのままで行なった近自然工法がある。川は川幅の5～8倍の蛇行を繰り返して流れる。川幅に応じて、自然が復元する力を与える。必要以上のことはしてはいけない。私は単なる土木屋であって、後は自然の回復力を待つのみである。

推薦図書

『とっぱすの風』～小さな国の大きな挑戦～ 宮崎暢俊（七賢出版）
里地ネットワークの幹事である熊本県小国町長が町での取組を著しています。

『大地に建つ 2000年後の建築家と子どもたちへ』 池田武邦（ピオシティ）
超高層ビル建築から日本の生態に根ざした環境づくりへ。
著者が身をもって日本の歩むべき道を指し示した作品。

以下は、里地セミナーに講演いただいた福留氏が所長を務める（株）西日本科学技術研究所の出版物です。
今回の講演資料としてご紹介します。この書籍に関するお問い合わせは、西日本科学技術研究所へ。
〒780-0812 高知市若松町9-30 TEL 0888-84-5151

『河川と小川 - 保全・開発・整備 - 』 バイエルン州内務省建設局刊行物第21巻

『ジードルングとラントシャフトにより多くの自然を』 '91国際水辺環境フォーラムより

『近自然工法の思想と技術』 - 人と自然にやさしい地域づくりのコンセプト -

『水制の理論と計算』 - 近自然河川工法の発想を助けるために -

『森は私の先生』 改訂（森林病害論）

『林鉄』 - 寺田正写真集 -

『仁淀川』 - その自然と魚たち - 開発の中に生きるようす -

『近自然河川工法の研究』 - 生命系の土木建設技術を求めて -

おしらせ

『里地通信』次号は、1月2月合併号とさせていただきます。予定は、2月頭頃となる予定です。

環境保全型里地づくり事例調査報告

Let's 地元学

～ 愛知県美浜町における地元学の実践～

これまで『里地通信』でお伝えしてきましたように、夏から始まった愛知県美浜町布土地区の住民主体による地元学実践も約半年が過ぎようとしています。その間、「水のゆくえ」や「あるもの探し」などの地元資源調査をはじめ、野の草花のドライフラワーや竹炭の製作、第一回布土ウォーキングの開催など、活動の幅も広がってきました。今回は、12月6日に開催されたシンポジウムと布土体験ウォーキングの概要をお伝えします。(事務局 成田)



開催当日、楽しみにしていた子どもたちの願いが通じたのか、前日までの雨が嘘のように晴れあがり、雲ひとつない穏やかな朝になりました。

畑や水田に囲まれた布土公民館に、水筒などを手に持った親子連れの家族がつつつと集まり、すぐに公民館前広場はにぎやかになりました。布土地区の住民だけでなく美浜町全域、さらに三重県や関東、九州などの遠方からも布土ファンが駆けつけました。

体験ウォーキング

午前中は、布土の自然に触れる体験ウォーキングです。

美浜町を横断する自然遊歩道「オレンジライン」を中心に、身近な里地を2時間ほど散策しました。案内

人は、子どもの頃から里地を自分の庭のように過ごしてきた地元の遊びのプロの方々です。大人も子どもも、里地に住む人の昔からの知恵に驚いたり、道端に生育している植物の利用方法や遊び方を興味深く知ることができました。

例えば、布土の里山はやや低い山と谷の連続で、足元には山野草が多く、落葉樹も多くあります。40年ぐらい前までは生活に密着した場所で、特に燃料供給地として年間を通じて利用し、また子どもたちの格好の遊び場でした。昔は健全な松林も多く残っていてマツタケも豊富にとれたそうです。良質なマツタケがとれる場所はたとえ親兄弟子どもにも教えなかったとのことでした。

道々、大きな葉っぱで「うさぎ」のお面をつくったり、枝とツタを利用して弓矢をつくったり、それぞれ見つけた自然の素材と格闘しながら、愛着のもてるおみやげを持ちかえりました。

里山の自然がそのまま残っても、子どもたちが里山の中での遊び方を知らなければ遊びの文化はやがて廃れてしまうのではないだろうかという思いにかられました。遊びを実体験している大人たちが子どもたちと一緒に遊ぶことを通じ、地元の自然を使った遊びを「伝承」することも、最近立派になる一方の「祭り」同様、地域文化として大切に守り伝えていきたいものです。

ハラペコになりながらウォーキングから戻ってくると、広場には地元のお母さん方が朝から準備してきたご飯、味噌汁や焼き芋などをサービスしていました。めいめいに竹の器を使って食べながら、子どもたちはお互いの収穫物を比べっこ。こんなとき、一緒になって子どもたちの自慢話などを聞いていると懐かしく昔の自分を思い出してしまいます。

辺りを見回すと広場の一角では、手業を持った地元の方が竹細工やツタや野草などをアレンジした手芸作品などの講習会を行っていました。太い孟宗竹から鋸



と鉋、ナイフを使って見る見るうちに、いろんな遊び道具へと変わっていく様子を見てみると、「うーん、さすがだ」とつい唸ってしまいます。おじいちゃんの傍らで、お昼ご飯で腹いっぱいになった子どもたちが、「竹ぶんぶん」をつくってとか、「竹鉄砲」や「竹とんぼ」をつくってせがむ姿はいつの時代も同じ。ほほえましい光景です。一方のお母さんがたはドライフラワーや野草をつかったフクロウ作りを親子で熱心にかけていました。

試しに、なれない手つきで竹細工にチャレンジしてみました但不恰好なものしかできませんでした。でも、自分で作り出したという快感は十分味わえました。

あるもの探しの成果

地元で収穫された無農薬野菜やハーブ類、コンポストに使える「ぼかし」や竹炭などの展示・販売もありました。公民館内では、あるもの探しなどから得られた情報を書き込んだ布土の絵地図、布土で産出し、かつては、米・麦の精米や食器類の洗浄に活用されていた「みがき砂」や各種の竹細工、門松、竹炭類、ツタなどの地元でとれる素材を活用した手芸品などが展示されていました。

生き生きしたシンポジウム

午後からのシンポジウムは、公民館会場がほぼ満席の状態で行われました。

齋藤町長のあいさつでは、美浜町における「自然との共生の町づくり」を強調され、「布土地区住民による活動は革新的な取り組みとして今後の活動と成果を非常に楽しみにしている」とのコメントをされました。

そして、活動に参加されてきた方々が、布土の自然、文化、歴史、市民活動などそれぞれの得意分野につい



での発表を行ないました。このとき驚いたのは、あまり大きくない地区(約800世帯)の中に専門性を持った方が多くいるということでした。里山遊び、里山の動植物、きのこ、山芋掘り、みがき砂の歴史、祭りの山車の歴史、竹の歴史や利用法・竹炭作り、ハーブづくり、ぼかしづくり活動、ドライフラワーづくりなどの各方面に通じたプロが身近に住んでいたのです。

もちろんその道ではプロでも、発表はあまり慣れていないため、やや表情に硬さがあつたり、話に熱中しすぎて持ち時間がついついオーバーしてしまったりすることもご愛嬌です。話の内容に驚いたり、思わず笑ってしまったりして、住んでいる地域の自然や文化、歴史、さらにどんな特技を持った人が隣近所に住んでいるのかについて楽しみながら知ることができました。

地元学を行なうプロセスでは、住民同士のつながりが増え、お互いを知り合い、地域の抱えている諸問題を発見し、行政と一緒に改善のための方法を検討する機会が増えるなどの作用もあります。

今回のシンポジウムを契機に、地元による生きた「地元学」のスタートがきられました。美浜町布土地区にあった火種が、新しい風を受けて炎となって立ち上り、上昇気流となって自ら風を起し始めたようです。今後、美浜町の他地区にも火種は移り、さらに大きな風になって多くの地域に火種を移していくことでしょう。すでに、視察に見えていた三重県の方の地元でも同様な活動が始まりつつあります。活動の輪は確実に広がっています。

里地ネットワークとしても、目が離せない展開が非常に楽しみな地域のひとつです。今後も、地元学実践の地域として活動内容を報告していきたいと思えます。

イベント・募集案内

おぐに自然学校

小国町の豊かな自然と文化でおおいに遊び、すてきな「ふるさと体験」をしましょう。ネイチャーウォッチングや、ネイチャーゲーム、手づくり体験教室（チーズ、ソーセージ）、交流フェスタなど行われます。

日時：12月25日（金）～28日（月）

場所：熊本県小国町の自然の文化とフィールド

参加費：36,000円（宿泊、食事等込）

募集人数：30名

問い合わせ：（財）学びやの里

TEL 0967-46-5560 FAX 0967-46-5561

森の学校

長野県飯山市の「なべくら高原・森の家」。冬と言えばスキーとイメージされる方も多いと思いますが、ここでは冬の中での自然観察、雪国ならではの体験等、イベント盛りだくさん。温泉も近くにあり、雪の中で静かに温かく過ごしたいという方にはぴったりのところ。年末年始もクリスマスリースづくりから始まって、炭焼き小屋でのもち焼き等、毎日様々な体験イベントがあります。また、四季折々のすてきな自然と文化を楽しむ田舎体験コースも毎月（1月：和紙と火祭り体験）あります。

問い合わせ：なべくら高原・森の家

TEL 0269-69-2888 FAX 0269-69-2288

URL <http://www.avisnet.or.jp>

伝統技術を学ぶ市民参加の里山保全

木を伐る、玉伐り、ナル作り、木ごしらえ...季節毎の里山での活動を行っている里山倶楽部。里山の自然に触れたい方は誰でも参加できます。今回の案内は一例で、これ以外にも自然とのつきあい方、里山での生活の知恵、米作り等、様々なイベントが行われています。

「クヌギ苗木植え」

日時：2月7日（日）

「炭窯作り（耐火レンガ製、出炭量200kg）」

日時：2月27日（土）～28日（日）

「炭焼き」

日時：3月7日（日）・14日（日）・21日（日）・27日（土）4月4日（日）・11日（日）

場所：大阪府南河内郡河南町

参加費：大人500円

問い合わせ：里山倶楽部 TEL・FAX 06-4704-0018

正月の遊学舎

もともと冬は蕎麦がおいしい季節だけど、大晦日の夜の蕎麦はまた格別。遊学舎では毎年、村のおばあちゃんに来て貰ってみんなでわいわいと蕎麦打ちをします。

長野県美麻村で正月を過ごしてみませんか？年末の餅つきから始まり、蕎麦打ち、おんべ等、行ないます。

日時：12月30日（水）・31日（木）・1月3日（日）

場所：長野県美麻村

問い合わせ：美麻遊学舎

TEL 0261-29-2625 FAX 0261-29-2624

里地ネットワーク会員総会

昨年2月25日の設立シンポジウムから早一年。今年度は様々な方の全国での試みを勉強させていただきました。会員の皆さんの知性とパワーあふれる活動をネットワークし、より大きな活動へと広げていきたいと考えております。今年度の活動報告を兼ねました会員総会を開催いたします。皆さんぜひご参加ください。

日時：2月13日（土）10：00～12：00

場所：東京国際フォーラム

参加費：無料

問い合わせ：里地ネットワーク事務局

TEL 03-3500-3559

里地シンポジウムのご案内

「北海道里地ネットワーク シンポジウム」

日時：平成11年2月5日（金）～7日（日）

場所：北海道標茶町

参加費用、宿泊などにつきましては、お早めに里地ネットワーク事務局までお問い合わせください。TEL 03-3500-3559

受付は、1月11日～20日の間、電話のみとさせていただきます。

里地ネットワーク事務局では、本年1年間、さまざまな地域の人々に会い、地域づくり、地域活性化の試みに接してきました。この中で、特にネットワークとして相互に学び合い交流を行なうべきではないかと考えた地域があります。

公民館制度をひかず独自の地域振興会を継続し今日のコミュニティープランによる地域づくりを行なう「熊本県小国町」

戦後すぐに公民館制度を独自の自治公民館制度に改定し地域計画を進めている「宮崎県諸塚村」昭和初期の開拓酪農と10余年前の集落再編の際に地区計画を推進した「北海道標茶町」

13年前にたった2人で始まった地域活性化運動（CCPT：智頭町活性化プロジェクト集団）から始まる「日本1/0村おこし運動」と「ひまわりシステムのまちづくり」を推進する

「鳥取県智頭町」

それぞれ固有の自治意識と地域リーダー、そして、外部支援者たちによる地域づくりの試みは、社会システムの観点から、また、自治の形成過程、課題、障害、解決に向けたさまざまな試みへの挑戦の足跡そのものであると思います。開催地は、釧路湿原と阿寒国立公園を南北にもつ北海道標茶町です。道東の白銀の地で、これからの地域づくりについて語り合いませんか。初

日は、釧路湿原に面した「憩の家かや沼」で、スライドなどの映写と懇親会的な交流の場を持ちたいと考えています。前後に、標茶町の自然をゆったりと体験できるよう、宿泊は、2日とも同じ場所を設定しました。

プログラム（予定）

2月5日（金） 標茶の紹介と交流会

16：00 までに、かや沼にチェックイン（集合）

17：00 標茶のスライドを上映し、
四季の標茶をしってもらう

標茶町の地域振興会の活動の紹介と参加者の自己紹介

18：30 夕食兼懇親会

2月6日（土） 北海道里地シンポジウム

10：00 開会趣旨：里地ネットワーク

10：10 開会挨拶：標茶町長

10：20 小国町 宮崎町長、木魂館 江藤館長より報告

11：50 宮崎県 諸塚村より報告

12：30 休憩、昼食（お弁当）

13：30 鳥取県智頭町より報告

14：45 標茶町 虹別地区、塘路地区、阿歴内地区、
栄地区、久著路地区他より報告

16：00 さまざまな町の話聞いて、一言コメントを

2月7日（日） 標茶町視察

A：ガイド付き湿原の周辺散策

冬の湿原の中の木道を散策、塘路湖の氷上ワカサギ釣り

犬ゾリ体験、乗馬体験、オオカミの目から見た環境教育

B：学校訪問、酪農家訪問、阿歴内地区訪問

保育所、小中学校、地域の集会施設をひとつにつなげた久著路地区

シンポジウム

「新田園生活のすすめ」

21世紀のライフスタイルを語ろう

日時：平成11年2月13日（土）13:00～16:15

場所：東京国際フォーラムホール C

参加費：2000円（チケットピアにて発売）

問い合わせ：里地ネットワーク事務局

TEL 03-3500-3559

里地ネットワークでは、法人会員である国際航業株式会社とともに、定年後の農的生活、特に、40歳後半から60歳の方々を想定した（もちろん若年者でもよいのですが）定年後のライフステージと、里地の活性化という視点から「農的な生活を楽しみ、里地の地域文化に寄与する」ライフスタイルの方策について検討してまいりました。この方向に関するひとつの具体案として、以下のシンポジウムを開催し、都市から里地への新たな仕組みづくりを行ないたいと考えています。ぜひともご参加ください。

また、当日午前10時から12時には、1年間の活動報告を行うための会員総会を、同じ東京国際フォーラムの会議室で行ないます。こちらへのご参加もぜひともお願いいたします。

「新田園生活のすすめ」開会趣旨

あふれでる情報と大量生産品や大量消費に覆われた都会。そこには、社会が第一線で働きつづけるあなたが、人生のセカンドステージについて考えたとき、自分にとって、そして、家族にとって最良の選択と言えるでしょうか。人々が自然と調和しながら暮らせる場所、人々が暮らすことで自然環境が保たれる場所、そして心豊かに生活できる場所こそが、私たちの心の故郷であり、人生のセカンドステージへと、おだやかにシフトしていく場としてふさわしいと考えます。心の豊かさを求めて自然にふれ、自然の中で簡素に暮らすこれからのライフスタイル＝新田園生活を、語られるようになった背景を探りながら実践なさっている方々の生き生きとした話しを交え、21世紀のあたらしい暮らしのあり方を提案します。

主催：里地ネットワーク、国際航業株式会社

後援：株式会社パソナ、株式会社法研、ライフプラン倶楽部、「田舎暮らしの本」宝島社、八郷町農業協同組合、やさと生産組合

内容：

基調講演： 京都大学 内藤正明教授

「自然循環型社会システムとは...」(案)

講演： 女優、農政ジャーナリスト 浜美枝

「15年の田舎暮らしからの思うこと」(案)

特別公演： 社会風刺コント、THE NEWSPAPER

「都市生活と田園生活」(案)

抽選会：有機野菜産地直送品

パネルディスカッション：

失敗しないで田舎暮らしを始める方法

司会：竹田純一（里地ネットワーク 事務局長）

パネラー：

浜美枝（女性の実践者代表）

合田寅彦（男性実践者の代表）

竹越秀和、愛子夫妻（夫婦実践者の代表）

佐藤信弘（マスコミ代表：田舎暮らしの本編集長）

大山充（田舎暮らし事業のしかけ人）

また、当日会場にてシンポジウム運営のお手伝いをしていただける方を20名ほど募集しています（謝礼あり）。ご希望の方は事務局までご連絡ください。

『杉と住まいと暮らしの町づくりシンポジウム（仮称）』

日時：2月27日（土）

場所：秋田県二ツ井町（未定）

内容：秋田スギを使った産直住宅の振興から始まった森の学校。8月には夏の学校も開催され、今回冬の学校が2月25日～27日に開催されます。この期間中にシンポジウムを開催します。これからの二ツ井の町・産業・暮らしづくりを、シンポジウムを通して考えていきます。詳細は次号にてお知らせいたします。

事務局日記 98年11月

11月10日

茨城県八郷町訪問

事務局では、国際航業が来年度実施しようと検討を重ねている定年退職者を対象とした農的な生活への1ターン事業「新田園生活の提案」を、企画検討を行なうためのモデル地域として、八郷町を視察してきました。筑波山麓の東に位置する8つの里のある牧歌的な農村には、都市近郊からたくさんの帰農者が入ってきており、新規参加者にも比較的開かれた文化を持っている地域です。

ここで、すでに有機農業を営んでいる生産者グループに、地域への案内役になっていただき、地域にとっても活性化の一躍をかえるように、慎重に、じっくり、計画を進めています。来年2月13日にシンポジウムを行います(案内参照)ので、ぜひともお越しください。

11月14日

三重県伊賀の里

モクモク手づくりファーム訪問

里地ネットワークの幹事でもある農林水産省の長谷山さん(10月号セミナー報告参照)が主宰する「農村交流ネット21」。その本年度の幹事を務めている元気な農業団体「モクモク」を訪問しました。モクモクは、ビール工場計画の時点から、私も勉強させていただいていたため2年ぶりの再訪問でしたが、この2年間に飛躍的な発展をされていて驚くばかりでした。みなさんも、一度訪問されてみてはいかがでしょうか。

11月18日

鳥取県智頭町訪問

かつて環境文化研究所に在籍し、現在は、鳥取県智頭町で町の総合計画作りアドバイザーである河原さん(10月号セミナー報告参照)をたずねてきました。智頭町は、「ひまわりシステムのまちづくり」「日本1/0村おこし運動」を行なっている革新的な地域。ここでの取り組みが全国各地で参考にされ、地域固有の手法を開発して、地域振興が行われればと願っています。詳細は、北海道シンポジウム(2月5日~7日)およ

び、会員総会(2月13日)でご報告いたします。

11月28日

長野県四賀村で交流会

鳥取県智頭町の集落のひとつで、浄瑠璃人形と都市生協との交流により地域活性を行なおうとしている集落があります。この集落の人口は50人弱、ここから、27名が市民農園の視察にはるばる11時間かけてバスに乗ってやってきました。訪問先は、私自身が以前から関わっていた四賀村ラインガルテン。そこで、四賀村中島村長さんをお願いして、相互に学び逢う交流会を開催していただきました。今後も事務局は、地域間で学びあえるしくみ作りも検討していきたいと思いますので、積極的なご参加をよろしく願います。この日は、三重県市町村振興会の別府さん、山形県最上町の管さん、日本大学の学生で市民農園を調べている谷口さんも、遠方はるばるご参加いただきました。

12月6日

愛知県美浜町 シンポジウム

シンポジウム報告参照

12月8日

熊本県小国町訪問

北海道標茶町で、来年2月5日から7日に開催するシンポジウムの事前準備と、小国町での1年間のさまざまな取り組み、および、九州圏でのグリーンツーリズムの動向調査と、水俣シンポジウムの連動性を持たせるため、熊本県庁地域政策総室奥園さん、熊本大学佐藤誠教授、自然計画の代表・松下さん、オーガニック認証協会の小田さんと、九州での動きについてさまざまなディスカッションをおこなってきました。形になりましたら後日ご報告いたします。

夏の北海道にて(事務局・竹田)

